

アゲハチョウだ！！ < 4年間の子どもの姿と環境 > めるへんの森幼稚園（宮城県仙台市）

東北地方は一般的に、アゲハチョウの餌である柑橘類を栽培する環境に適していない。そうした環境を考えて展開した、平成16年春～19年夏までの実践事例（対象となった園児は、3歳児、4歳児、5歳児である。）

幼 児 の 姿	環 境	保育者の援助	保護者の参画
<ul style="list-style-type: none"> ・今まで、こんなにたくさんの蝶が飛び立った瞬間に出会ったことの無い子ども達は、「わあー！」っと、大きな歓声をあげ、アゲハチョウが飛び立っていく様子に拍手を送っている。 ・「がんばれ！」と励ますように応援している。 ・翌日になっても動けないでいる蝶の様子を心配そうにのぞき込む子どもがいた。 ・春、夏の昆虫植物図鑑を喜んで見ており、先日放した蝶を調べる姿も見られる。 ・図鑑を肩に下げながら園庭で虫を見付けては調べようとする姿が男児女児共に見られた。 	<p>H16年度 蝶との出会い（4月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の方からアゲハチョウのサナギを、たくさん頂いた。すでに羽化したものも多かった。そこで、羽化したものは、全園児が見守る中で空に放す。 ・羽が変形した蝶もいる。飛べない。せめて蜜のある所へと、花の上に置く。 ・月間絵本の付録「春・夏図鑑」を全員に配布。 ・いつでも見られるようにと、自分のロッカーにしまい、自分で管理する。 		
	<p>環境づくり：蝶がやってくる環境をめざして</p> <p>4月にたくさんの蝶との出会いを経験した子どもたちの感動や、驚きを一時的なものに終わらせず、繰り返し出会える感動にしていけるために、園内に山椒の木を植え、アゲハチョウが卵を産み付ける環境づくりにとりかかる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山椒の葉にアゲハチョウの幼虫が数匹見つかる。 ・園長が登園してきた幼児の手のひらに葉っぱを乗せ、幼虫を見せる。地面に置いたまま見るより、手のひらに乗せた幼虫を見ることで、「こわい、気持ちが悪い」などの拒否する気持ちが弱まるのではないかと。 ・幼虫の数も少ない。全園児が見られる1F廊下の窓辺に置く。餌交換の様子を見せる。 ・あっという間に幼虫は葉を食べ尽くす。餌が不足。植樹したばかりの幼木の山椒は、餌に使い果たし、葉はわずかしが残っていない。アゲハチョウの食欲に、葉の生長が追いつかず、これでは蝶は育てられない。 <p>保育者が自宅の庭から山椒の葉を持ち寄り、不足していた餌の補充に協力。苦勞して確保した餌を食べて育った立派な蝶を、子どもたちと共に観察し、自然の中へ放す。</p>		
<ul style="list-style-type: none"> ・「すごい！本物の畑だ！」と初めて出来た畑の土づくりを教師と一緒に喜んで取り組んだり、水をまいたりしながら、食物の生長を楽しみにしている。 ・「すごいよ！先生！大根の葉っぱにいっぱい穴があいてる！」「キャベツに幼虫がいっぱい付いてるー！」「じゃがいもの葉っぱには、テントウムシがたくさんくっついてるよー！」と、作物の葉に付く小さな生き物にも敏感に気づき、個人用のミニ図鑑で調べたり、畑に足を運んだりする姿が増えてくる。 ・「うんちが汚いー」「青虫がこわい！」という。 ・「なんで同じ蝶なのに、餌が違うの？」「幼虫の模様が違う！」「アゲハチョウの幼虫の方がモンシロチョウの幼虫より大きい！」等、次第に疑問や不思議に思うことが増える。 ・サナギから、蝶になるという羽化の様子を間近かで観て、「先生！蝶になってたよー！」「サナギの中が空っぽになってるー！」「サナギの 	<p>H17年度 環境づくり：畑を作る（4月）</p> <p>山椒に続き、モンシロチョウが卵を産み付けるキャベツを畑に植える。</p> <p>子どもの発見や驚き、感動をクラス全体へ伝えたり、学級だよりなどで家庭へ知らせたりしていき、クラスや家庭の中でも共感できる環境づくりに努めていく。</p> <p>畑づくりの情報を聞きつけた保護者(父)が、「土づくりをきちんとすれば、種はかならず芽を出すよ」と、畑づくりを手伝ってくれる。(数名の保護者が集まる)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・畑で育てたキャベツにモンシロチョウが、卵を多数産み付ける。(各クラスの飼育ケースへ移動する) ・山椒の木にもアゲハチョウの卵が見つかる。種類の違いに気付くように飼育ケースを並べておく。 ・より身近なものに感じ興味が持てるように、各クラスで飼育ケースに入れて育てる。 ・モンシロチョウの幼虫の餌であるキャベツはスーパーで調達する。アゲハチョウの餌である硬いとげのある柑橘類を庭木にしている家庭は少なく、確保が難しい。昨年より餌不足が深刻化する。園長が試しに植木鉢に柑橘類の種を植える。それを知った保護者(母)が種を集めて幼稚園に持って来る 		

皮がきつくなつたんだよー」と、感動の姿が見られるようになる。

姿が見られるようになる。餌不足の日は続くが、何とか蝶の誕生まで、見届けることができる。

- ・「園長先生のみかんの鉢の葉を見に行きたい」「みかんや山椒の葉しか食べないのかな？」と、意欲や疑問の声があがり、詳しいことが書いてある図鑑を図書コーナーから探し出してきたり、家庭から図鑑を持って来たりする。
- ・S児、家の庭の柚子の枝を取り、嬉しそうに登園する。
- ・「僕も植えてみたい」と、種を植える事への関心が高まり、ポットをもらいに行き、園長に分けてもらう。
- ・園長のポットの隣に並べたがったり、保育室に置きたがったりする。
- ・「先生！！今日の給食にオレンジが入ってるよー！」「先生！プリンカップちょうだい！」「オレンジに種があった人はこれに種を入れよう！」
- ・給食に出たみかんの種を集める子どもが出てくる。「ラッキー！僕のオレンジには種が2つもあった」「この種おっきいー！」「私のオレンジには種がなかった...」など、給食のオレンジの種で、一喜一憂。
- ・T児、「先生！この種も植えてみよう」と、家からアボカドと林檎の種を持ってきて畑に植える。柑橘類の種から、他の果実の種へも興味の芽が広がり始める。
- ・「おじいちゃんが取ってきた山椒の葉にも卵が付いていたよ」と、興奮気味にK児が山椒の葉を持って来る。
- ・「うん比べてみよう、楽しみ」クラスみんなで、盛り上がる。
- ・同じ目標をもち、クラスが丸となって観察をすることで、
 - ・卵の色が黄色から茶色に変わること気付く。
 - ・卵から幼虫が誕生すること気付く。
 - ・幼虫の成長やサナギへの変化に気付く。ことができ、羽化を楽しみにする。



H18年度 餌づくり：餌の探求（5月）

・一番最初に試し植えした柑橘類の種が半年を経過し、芽を出し、10cmほどに生長。（20～30個）これだけではまだ足りないため、保護者に餌確保のための呼びかけをしたり、柑橘類の種から芽が出てきたことをプリントで知らせたりしていく。

「きっとみんなの種を植えたら、たくさんさんの芽が出てくるね」と、保育者も子どもたちの好奇心に共感し、種の数や数を数えたり、子どもの声に耳を傾けたりする。



アゲハチョウの餌にはならない種だが、子どもの気持ちに寄り添い、どの種からどんな芽が出てくるか、子どもたちと共に植えてみる。

山椒の木が庭にあれば分けたいとの呼びかけだけでは、なかなか数が足りない。そこでなぜ柑橘類の種を集めているのか、園の実際の様子を学級だよりや園だよりでこまめに保護者に知らせる。

呼びかけを知り、M児の母は実家のある田舎から山椒の葉をもらってくる。K児の祖父が、近隣の水の森公園に出かけ山椒の葉を集める。保護者の中には、家族で食べた柑橘類の種を捨てずに集め、自宅でも植えてみるという実践をする動きが出て来る。

「水の森公園の卵と、幼稚園の卵と一緒に飼ってみて、同じか違うか見比べてみよう」見比べるという言葉で、「色は？形は？」と発見したいという気持ちを引き出し、観察力の高まりを促す。

<その後の姿>

- ・ニンジン葉に新たな幼虫を見つける。お月見団子やドーナツ作りなどの時にニンジンを収穫したが、葉の半分は食べずに幼虫のためにとっておく。育てるうちにキアゲハと分かる。
- ・保育室の温かさのためか、2月に季節外れに羽化したことを知る。冬に生まれても寒さで生きていけないことも知る。
- ・テレビの情報で「蝶のうんこ染め」を知り、ハンカチを染める。

考察 十分な餌が確保されることによって、一過的な飼育ではなく、卵から成虫までの過程を繰り返し、そしてサナギの越冬まで、保育室の中に自然に近い環境を作ることができた。

そのことが、子どもたちの観察の機会を増やすと同時に、アゲハチョウのみならず、食育のねらいで栽培していたニンジンに付いたキアゲハの幼虫やキャベツに付いたモンシロチョウの幼虫等の発見や飼育活動につながり、それぞれの形態を比較したり観察したりする態度を生み出した。（チョウチョウだけでなく、カブトムシやカマキリも卵からの飼育に挑戦したり、図鑑を肩に掛けて雑草の中を虫を探して歩く子どもたちの姿も多くなるなど、「好奇の目」「驚きの心」「新しい発見」「発展的な態度」が着実に育ってきた。）

餌作りは、当初、保育者たちの家庭から始まった。自宅で食べた柑橘類の種を意識してとっておくという行動と、それが育ち、それを餌とした幼虫の成長の姿を見つめることによって、保育者自身の意識に変化が生まれ、保育者自身の中に「科学する心」が育ってきた。さらに発展的な活動にも目を向けるようになり、キアゲハの餌づくりに挑戦したり、幼虫の糞を使った「うんこ染め」に挑戦したりするなどの姿が見られるようになってきた。

みどころ

保育者はたくさんアゲハチョウの羽化や飛び立つところを観た子どもたちの姿に感動しました。そして、この感動体験を大切にしたいと考えて熱心に環境作りを進め、年々子どもの体験が豊かになっていることが分かります。「飼育をするためには、餌やりなどの世話をすることが大切である」ということを、飼育している幼虫や身近な大人の姿から学んでいます。そして、子ども自身がいろいろなこと気付きながら、大事に飼育し観察する体験につながっています。